

中高年者の主観的余命と世代性の関連

中田 小百合

1) 序論

第一義的に“次世代を導き、確立することへの関心”と定義され、のちに“自分自身の更なる同一性の開発に関わる一種の自己一生殖も含めて新しい存在や新しい製作物や新しい概念を生み出すこと”と再定義された世代性は、これまで中年期の発達課題として研究がおこなわれてきた。一方で、老年期にも世代性が発達する可能性が見出され、それは自己の死を意識することで発達するという、中年期とは異なる特徴を持つことが明らかとなっている。しかし、老年期における死の意識と世代性の関係を直接的に検討した研究はおこなわれていない。また世代間交流は、死の意識と世代性の関係に影響を与える一要因であると考えられる。

2) 目的

本研究では、老年期における世代性と、その関連要因である死の意識の関係を明らかにすること、また、日常生活における若い世代との交流が、それらの関係に与える影響を明らかにすることを目的とした。余命を短く予想する者は死を強く意識していると考えられるため、世代性が高まる、また、前述の関係において、世代間交流頻度が高いことは、世代性を促進する要因となるという仮説の検証をおこなった。

3) 方法

大阪府下の民間老人大学に在籍する高齢者を対象に、質問紙調査をおこなった。調査内容は、調査対象者の基本属性、健康、世代性、予想年齢、世代間交流頻度であった。

4) 結果

相関分析をおこなった結果、予想余命と年齢($r = -.56, p < .01$)に負の相関、性別($r = .15, p < .05$)、教育歴($r = .18, p < .01$)、主観的健康感($r = .22, p < .01$)に正の相関がみられた。また、世代性と教育歴($r = .23, p < .01$)、主観的健康感($r = .17, p < .05$)、疲労感($r = .15, p < .05$)、予想余命($r = .19, p < .01$)に正の相関がみられた。強制投入法による階層的重回帰分析をおこなった結果、世代間交流頻度×予想余命の交互作用項($\beta = -.15, p < .05$)の標準化偏回帰係数は有意であった。続いて単純主効果の検定をおこなった結果、世代間交流頻度が高い場合は、世代性に対する予想余命の効果は非有意であったが、世代間交流頻度が低い場合は、予想余命($\beta = .33, p < .05$)は世代性に対して有意な正の効果を示した。

5) 考察

死を強く意識している者は、自身の余命を短く予想し、そのことにより世代性が高まるという仮説は支持されなかった。この理由として、一つ目に、老年期における世代性の発達には、死に対する認識、それに伴う他者に対して投資可能だと考える時間の長さが影響を与えているという可能性、二つ目に、「生きられると予想する」年齢には、「生きたいと希望する」年齢が反映されており、死を意識した上での、生に対する積極的・意欲的な態度が、世代性の高さに影響を与えているという可能性が考えられる。

また、前述の関係において、世代間交流頻度が高いことは、世代性を促進する要因となるという仮説は支持されなかった。この理由として、一つ目に、世代間交流を自己に対して意義のあるものだと捉えているかどうかの影響を与えているという可能性、二つ目に、世代性に関連する現在の行動の有無が、次世代に対する関心や、世代性に関連する今後の行動に対する意欲に影響を与えているという可能性が考えられる。(臨床死生学・老年行動学)